

エネルギー問題

11月末からパリはシベリア寒気団が降りて冷え込む毎日である。朝晩はマイナス3-4℃、昼間も3-4℃を超えず「寒い」の一言だ。暖房なしでは凍えて生活できない。

ウクライナ戦争以来ヨーロッパのエネルギー供給は各国とも厳しい状態で、フランスも寒くなる前から「室内の暖房設定は22℃から19℃に下げる」、使わない部屋の電気は消す、使用しない家電をコンセントから抜く、屋外の飾りは極力避けるなどの節電が奨励されている。

市町村のレベルでもクリスマスのイルミネーションをしない選択、街灯の数は減らし早い時間に消す、温水プールを閉める、体育館や公共文化施設の暖房温度を下げるなど考えられるさまざまな対策を積極的に導入している。これまで自由に使ってきたエネルギーは無制限ではないことを目の当たりにする冬だ。

フランスには56の原発があり、これまでは電気の輸出国としてドイツなどに供給していた。2011年福島原発事故から原発大国フランスでも原子炉を閉める方向に向かっていった。今年の10月時点で原子炉の点検などを理由に56基の内26基が稼働中止していた。気温が下がるにつれフランス国内の消費も危うくなり、政府は計画節電の可能性を発表した。



フランスのシボア原子力発電所=ロイター

緊急事態に対応すべくクリスマスを十日後に控えた今日、停止26基中10

の原子炉が再稼働し国内供給を支えている。ウクライナ戦争でエネルギー自立を迫られたフランスは再び原発を選択する方向へ向かっている。ロシアはウクライナ各地のエネルギー源を攻撃し、電気のない暗くて凍える冬でウクライナ市民を苦しめている。まさにエネルギー戦である。



ウクライナ戦争はエネルギー問題だけでなく、日常生活のすべてに影響している。穀物不足からパンや小麦製品値上がりし、電気代の高騰で生鮮食料を扱う業者は値上げせざるを得ない。

戦争に加えて、12月に入りコロナ、インフルエンザ、小児気管支炎

が急増している。鶏インフルエンザも大流行で、クリスマス定番の鶏、フォアグラは昨年から30%近く値上がりしている。何もかもが値上がりし、いつまで続くのか先が見えない。年金受給資格年齢を65歳に引き延ばす案を始め、フランスも問題山積だがクリスマスが終わるまですべて保留、保留、保留である。

何も良いニュースがなかった2022年、最後に急に盛り上がりを見せているのがサッカーワールド杯である。病気や故障ですぐに敗退するだろうと思われていたフランスチームが決勝に残った。2018年7月に続いてフランス二連覇なるか、最高のクリスマスプレゼントなどマスコミも大きく取り上げている。4年に1度のワールドカップはプロのサッカー選手にとってオリンピックの金メダル以上である。13日アルゼンチンがクロアチアを破り、14日フランスがモロッコに勝ち決勝進出を決めた。18日(日)16時からのアルゼンチン・フランス戦はフランス中がテレビ観戦するだろう。リオネル・メッシ対キリアン・エムバッペと今から盛り上がっている。個人的にはモロッコが決勝に残って、アフリカ大陸に初の優勝杯を持ち帰って欲しかったが残念だった。クロアチアとの3位決定戦に勝ってくれることを期待している。

スポーツが政治のプロパガンダになってはならないが、現実的には国威高揚の格好の手段になっている。地球温暖化で世界中がエコロジーを重視する傾向に反して建設されたカタールのスタジアム。砂漠の国のインフラ整備には巨額の出資が行われた。そして、その陰には安く悪条件で使われた海外の出稼ぎ労働者、建設中に事故で亡くなった作業員がいた。フランスでもカタール・ワールド杯をボイコットする動きがあったがフランスが勝ち進むに従ってその声も聞こえなくなった。ヨーロッパ議会のギリシャ女性議員エヴァ・カイリの賄賂事件(カタールが会場に選ばれるように多額の現金を受け取った疑い)など、大きなスポーツ大会には暗い影がある。こうした負の部分があっても18日(日)決勝戦をフランス中が楽しみにしていることに代わりはなく、勝っても負けてもシャンゼリゼ通りは熱い夜になるだろう。